

離島のアートプロジェクトと地域活性化

室井 研二（名古屋大学大学院環境学研究科准教授）

[本城先生]

「離島のアートプロジェクトと地域活性化」というタイトルでお話を伺います。室井先生お願いいたします。

離島のアートプロジェクトと地域活性化

名古屋大学 室井研二

[室井先生]

よろしくをお願いいたします。名古屋大学の室井と申します。お招きいただきありがとうございます。たった今、江戸時代の深遠な話を聞いた後なので、自分の話が何か軽薄なように感じてしまいます。

今回、瀬戸内圏研究センターから「瀬戸内国際芸術祭のことについて話をしてもらえないか」という依頼をいただき、私は3年前まで香川大学にいて、芸術祭に関する調査・

研究を行っていたことから頼まれたものなのでお引き受けをしたわけです。しかし、もう3年間も瀬戸内海を離れているので、いささか話に古くなっているところがあるかと思えます。でも、それでも良いということだったので高松に来ました。もし、新しい変化のようなものがあれば、この場で教えていただければと思います。

まず、簡単に自己紹介をさせていただきます。8年間ほど香川大学にお世話になって、その間、私は香川県の離島の調査のようなことばかりをやっておりました。豊島の産業廃棄物の不法投棄事件であるとか、瀬戸大橋の橋脚になった与島の調査であるとか、あるいは丸亀市に広島という島がありますが、そこで島民総ぐるみで高齢者福祉のNPOを立ち上げたりとかしていました。

そういった活動を通じて、開発にとまなういろいろな矛盾をパアッと被ったような島といろいろな付き合いが多かったわけです。このような島の非常に厳しい生活条件の中で瀬戸内国際芸術祭が始まることになりました。私自身がなぜ瀬戸内国際芸術祭に関する調査に関わったのか、今そのきっかけはうろ覚えなのですが、当初、この芸術祭について少し懐疑的でした。そういう厳しい離島の現実み

個人的経歴

2005年4月～2013年3月まで香川大学に勤務。
瀬戸内の離島調査に携わる。

- ・有害産業廃棄物が不法投棄された島
- ・瀬戸大橋の橋脚になった島
- ・地域ぐるみで福祉NPOを立ち上げた島
- ・瀬戸内国際芸術祭の舞台になった島

たいなものを肌身に滲みて内情を知っていた。まあ、そのような立場だったので、「芸術祭というのは何か今一つ胡散臭い^{うさんくさ}というか、何なのだろう」という懐疑的な気持ちを持っていました。そういう先入観を持っていたということをまずお断りしておきます。

最初に、このようなアートを使ったツーリズムが、いったいどういう背景で出てきたのかということについて、よく指摘される論点をお話したいと思います。このようなものは一般的にルーラルツーリズムと言われており、農村的な地域を都市の人達が回るようなツーリズムです。

それは割と最近見られるようになってきたわけで、どう言ったら良いのですかね。特に日本の場合だと高度成長期以降、農山村が衰退に向かっていたのです。国は産業の高度化というか、工業化を進めて行ったわけで、どんどん農山村が衰退して行く。特に1990年代以降になると、農産物市場が国際化しだして、ますますガタガタになって行く。

その一方で、都市の住民に農村的な景観とか、風景とか、生活スタイルみたいなものに対するある種の郷愁というか、憧れみたいなものが高まってきて、都市の方からある意味、有名な観光地ではなくて普通の農村に観光に行くというブームが起こって来ました。

だから、農村の農業という点での経済的な基盤がこれまでになく急速に脆弱^{ぜいじやく}になってきているのですが、他方では観光という観点から、また新たなスポットを浴びるようになって、なにか農山村に変化が生じてきている。そして、「そこで行われているルーラルツーリズムというものは、はたしてどういうものなのか」ということが今研究されたりしているわけです。それはもしかすると、都市の消費者の論理で農村が消費されてしまっていく、そういうものであるのか。それとも農山村が再び息を吹き返す一つのチャンスを与えるものなのか。その実態とか可能性というものはどういうものなのかということが、よく研究のテーマにされており、私自身、このような観点で調査を進めてきた次第です。

そんな中、とりわけ現代アートというものは、農村らしさ、農村ぼさ、みたいなものを表現したり演出したりするメディアとして注目されて、今ではそういう、特に地方とか農山村でアートを使ったツーリズムというものが盛んに行われています。

Rural Tourism

農産物市場の国際化を背景とした、都市と農村の経済的つながりの弱化。その一方で、農村空間に対する都市住民の消費的・ツーリズム的関心の高まり。

ツーリズムによる農村再生の可能性とは？
「農村らしさ」を対外的に表象する手段として注目を集める現代アート。

瀬戸内国際芸術祭もそういう現代アートの付いたルーラルツーリズムの非常に大きな代表的なイベントとして位置づけられるのではないかと考えています。ご存知のように2010年に備讃瀬戸の離島と高松市を舞台に開催された大規模な瀬戸内国際芸術祭ですが、「この芸術祭の特徴として、3つぐらい上げられるのかなあ」と考えています。

一つは言うまでもなく、一流のアーティストを招いての現代アートを活用したイベントであったこと。この芸術祭、対外的には都市と農村の交流による地域振興。すなわち、瀬戸内海を文化的な拠点として、都市と農村の交流を活性化させるという狙いを持ったイベントであったということだと思います。

もう一つは離島を会場にしたイベントであったということ。ご存知のように瀬戸内の離島はすごく過疎高齢化が進んでいますよね。そういう所で、このような大規模なアートプロジェクトが行われたという点でも、注目を集めたイベントであったと思います。なので、離島の活性化といった面でも関心が寄せられたし、あるいは現代アートと過疎の離島というコントラストみたいな面からも、興味深いということであったと思います。

三つ目に、このイベントの運営主体になったのが、ご存知のとおり福武財団という大きな企業で、実施する際には香川県がその中で大きな役割を果たしています。そのような福武財団と香川県が2トップになって、そのもとに香川県内の商工団体を中心とした団体が数多く参加して、大規模な実行委員会組織が作られ事業が推進されました。

従来、このようなアートプロジェクトなどに財界や政財界が加わったりすると、すごく経済主義的な方向に進みがちで、コミュニティのニーズとかと対立したり、摩擦を起したりしがちだということが言われていたのですよね。だからそういう面でのジレンマみたいなものを、もしかしたら孕んでいるのかも知れない。その点でも島の人がどうなのかということに関心のある面白いイベントだったと思います。

すなわち、過疎の所を非常に大規模な組織で、アートを使ってイベントを興す。このような特徴を持ったイベントだったと思います。

お伝えしたように対外的には離島の活性化とか、都市と農村、都市と離島との交流を目的に掲げたイベントであったわけですが、その一方で、県などの行政機関も含めた大規模な実行委員会が組織されたこともあって、

瀬戸内国際芸術祭

2010年、備讃瀬戸の離島を舞台に開催されたアート・プロジェクト

- 現代アートを活用した地域振興
- 過疎地を舞台としたイベント
- 大企業と県を中心とした事業主体

閉幕後の事業評価

広報的には離島の活性化や文化交流を目的に掲げたイベント。その一方で、イベントの経済効果に対する大きな期待。

全県的な観光振興の推進（「香川せとうちアート観光圏」構想）。予想を大幅に上回る来場者、収益。マクロ地域経済的な効果の側面に偏った事後評価。

芸術祭に対する経済効果に大きな期待が寄せられるイベントでした。

芸術祭をただ単に実施するだけではなくて、それと合わせて香川県全体の観光をもっと盛り上げようということで、香川県は「香川せとうちアート観光圏」という国が出した観光圏構想にいち早くトライして、全県的に観光地の整備を行うなど、芸術祭と観光の連携に力を入れて実施しました。

これは芸術祭が開催される前の新聞記事です。このようなことをしたかいてあって、瀬戸内国際芸術祭は予測をはるかに超える多くの来場者があったし、経済効果という点でも、予測を超える成果を上げることができた。そして、このような観点から、この事業の推進主体の側では、芸術祭が成功であったというように総括しています。

芸術祭が終わった後の県議会で、このような内容で芸術祭の総括的な議論がされております。「予想を大きく上回る 93 万人の来場者があり、成功裏の内に閉幕した。今回の芸術祭は様々なメディアに取り上げられ、話題性があったことが、まずは成功要因であった。いろいろな課題もあったけれども、大勢の方々から香川を訪れたことに一定の経済効果が生じ、本県の知名度もアップした」。だから、主に経済的な面で事業が評価され、成功であったというように受け止められているというわけです。

しかし、先ほど言ったように、このイベントはそのような観光事業だけではなく、離島の活性化なども目標に掲げていたわけです。実際、イベントプロデューサーの北川フラムさんとかが割と力を入れて、芸術作品の作り方にしても、できるだけ島を表現する作品を作る、また島に長時間滞在して作ることをアーティストに要求したのですね。それで、できるだけ島の人達にもアート作品の制作とかに協力してもらって、あるいは大勢のボランティアを募って、行政機関だけでやるのではなくて、多くの人達の参加のもとに運営して

瀬戸内国際芸術祭の総括についてであります。芸術祭には、**予想を大きく上回る九十三万人余の来場者があり、成功裏のうちに閉幕したところ**であります。

そこで、**成功要因や課題など芸術祭の総括について、理事者の見解をたじたのであります。これに対して理事者は、今回の芸術祭は、さまざまなメディアに取り上げられ話題性があったことが、まずは成功要因だと考えている。**一方、運営面で不十分な点もあり、例えば、**県内の他の観光地への誘客不足などが課題として挙げられている。**しかしながら、**大勢の方々から香川を訪れたことにより、一定の経済効果が生じ、本県の知名度もアップしたと考えている。**

(2010年度香川県議会11月定例会)

閉幕後の事業評価

広報的には離島の活性化や文化交流を目的に掲げたイベント。その一方で、イベントの経済効果に対する大きな期待。

全県的な観光振興の推進(「香川せとうちアート観光圏」構想)。予想を大幅に上回る来場者、収益。マクロ地域経済的な効果の側面に偏った事後評価。

イベントをやるとかね。なんかそういう試みが盛んに行われたわけです。だから経済的な観点からだけではなくて、やはり、もう少し別の観点からの評価も必要なのだろうと思います。とりわけ会場になった島の人達の観点に立った評価というのが、県の事業評価の中に、あまり反映されてなかったように思うわけです。

そういうこともあって、芸術祭の前から聞き取り調査を始めていました。そして、芸術祭が終わった翌年の2011年3月に直島、豊島、男木島、女木島の4つの島で住民を対象にしたアンケート調査を実施しました。ここでは島民の視点から「芸術祭にどのような期待を寄せ、またその結果をどのように評価しているのか」ということを調査したわけです。

調査の手順等は地元の自治会の方や自治会長さんに協力していただきました。ここに来られている方はだいたいご存知だと思いますが、回答と回収は右図のようにしました。そして、回収率はそれぞれの島でこのようになっています。

もちろん4つ島に各々個性があるのですが、大きく直島とそれ以外というように、ここでは考えることができるのではないかと思います。直島は4島の中で唯一全域離島で、島が1つの自治体をなしており、人口規模も大きく三菱マテリアル直島精錬所がありまして、経済的な基盤が安定しています。なによりも1980年代ぐらいから福武財団が直島でずっとアートの町作り事業を継続的にやってきたのです。だから、そういう経験がある。

これに対して、男木島、女木島、豊島というのは一部離島であり、高齢化とか産業の衰退というのも直島に比べると非常に顕著であり、また言うまでもなくアート事業みたいなものの経験が皆無であるわけです。だから、直島と他の3つの島とではずいぶんと違いがある。そのような所でアートイベントが行われたということになります。

島民の事業評価

会場になった4つの島(直島、豊島、男木島、女木島)の住民を対象に、2011年3月アンケート調査を実施。

住民は芸術祭に何を期待し、その成果をどう評価しているのか。

調査の手順



回答は自記式。豊島は郵送法、他は自治会に依頼して回収。

直島 264/300
豊島 86/150
男木島 38/50
女木島 44

調査地の概要

	市町村名	人口 (2006年)	高齢化率 (2005年)	主産業	アート事業 の経験
男木島	高松市	236	61.4	漁	なし
女木島	高松市	292	57.4	漁	なし
豊島	土庄町	1185	43.7	農・漁・建	なし
直島	直島町	3397	27.8	製造・漁	あり

下は開催当時の直島の写真です。緑の建物は芸術祭に向けて作られた銭湯です。このように直島は古い町並みを生かした町づくりをすることによって、今では安定的に多くの観光客が訪れ、アートの島としても対外的に良く知られています。

直島



直島



直島



直島



豊島はごみ問題で注目を浴びた島ですが、湧水が出るなど農業の条件に恵まれており、棚田があったりして景観的に非常にきれいな島です。ただ人口がどんどん減っていて、このような廃校になった小学校の分校があったりします。そういうものに手を加えてアート作品にしています。

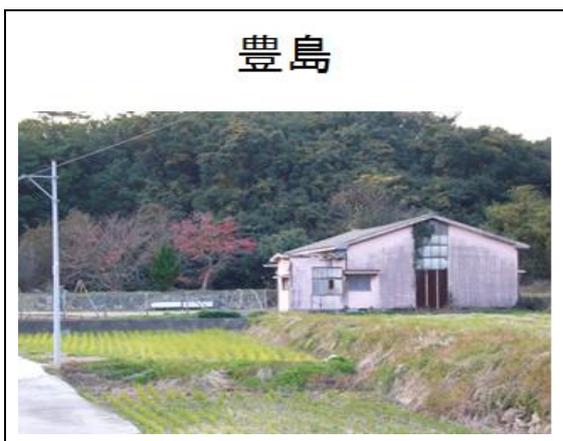
豊島



豊島



豊島



豊島



女木島は高松にすごく近い島で、半農半漁の島です。非常に狭い所にこのように畑があり、漁業と合わせて生計を立てて暮らしてきた島です。その女木島にはこのようなアートがあります。

女木島



女木島



女木島



男木島は傾斜地に家が密集している島ですごく急な坂があります。特に高齢化が進んでいて、高齢者が日常的に移動するのは結構大変になってきている感じの島です。だから、買い物とかで荷物を運ぶ時には、写真の乳母車のようなもので荷物を運んだりすることが多いので、これがアートに使われたりしています。

男木島



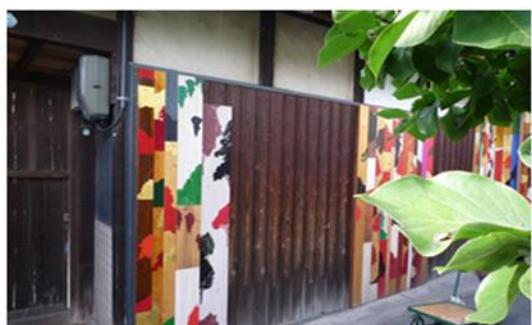
男木島



男木島



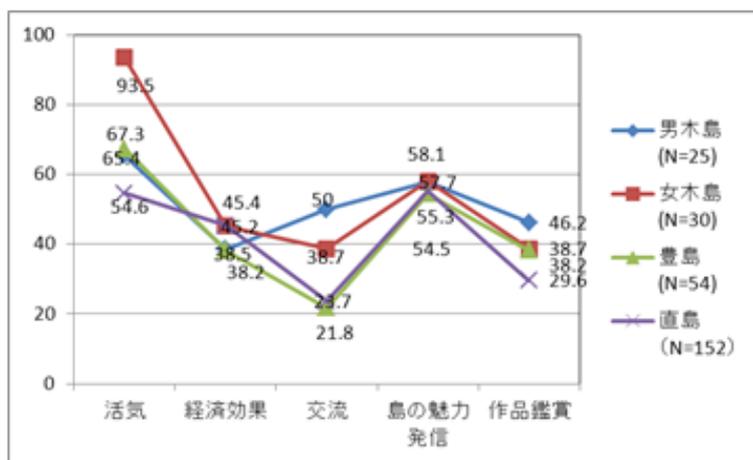
男木島



それでは、調査の結果について話します。まず初めに、これは「芸術祭が始まる前にあなたは芸術祭に何らかの期待をしていましたか」ということを聞いたものです。4つの島全部で6割ぐらいは「何らかの期待をしていた」という回答がありました。

「期待をしていた」と答えた人に、「じゃあ、何を期待していましたか」ということを聞いた結果がこのグラフです。

芸術祭に期待されたもの(M.A)

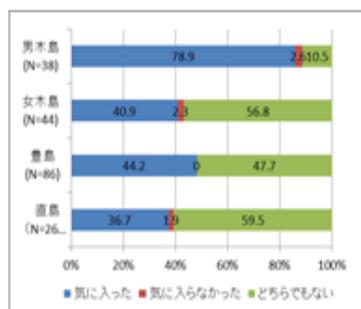


一番スコアが高いのが「活気だ」ということでした。芸術祭という大きなイベントをすることで、普段寂しくなっている過疎の島に活気が出るということを期待していた。続いて期待の高いのが、「島の魅力を外に発信できる」ということです。それに対して、「島外の人達と交流する」ということに対する期待はそんなに高くない。というか、島の間でずいぶん差があるのですが、全体として見た場合、低いということです。まあ、作品を鑑賞するというか、良いアートに接して鑑賞することに対する期待も相対的にはそんなに高いものではないし、経済効果に対する期待というのも、まあ真ん中あたりなのですが、それほど高いものではなかった。もっぱら活気が出るということに期待が寄せられていました。

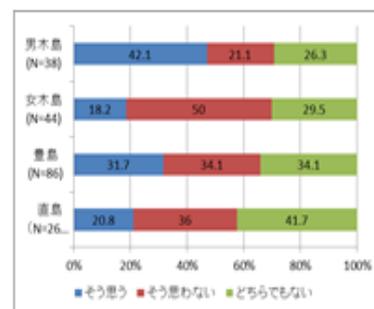
芸術祭の評価について最初に聞いたのは、「島に展示されたアート作品について、どのように感じましたか」ということです。その結果、作品に対する反応はそんなに悪いものではなかったということが分かりました。ほとんど高齢者ばかりになっている島なので、当初、「もっと評価が低くなるのかな」というように

アート作品の評価

作品は気に入ったか



作品は島を表現したか



考えていたのですが、「気に入らなかった」と答えた人は4つの島にほとんどいなかった。「どちらでもない」、「よく分からなかった」という意見がすごく多いのですが、「気に入らなかった」と回答した人は少なかった。

次に、「その作品が島の歴史とか文化を表現していると感じますか」と質問しました。このイベントではそういうことが目指されていたので、その評価を聞いてみたのですが、「そう思わない」という答えがそれなりに多かった。だから「少し現代アートは難しいのかなあ」ということが言えますが、「まあ作品が島を表現してはいなくても、作品を気に入った人は多い」というように考えられます。

全体的に見て、「まあ、そんなに悪い反応ではなかったのかな」と思います。ただ、ここで注目しておきたいのは、島の間ですごく評価に違いがあるということですね。一番高かったのは男木島です。一番低かったのが直島ですね。当初、こういう現代アートのようなものは、何と言いますかね、一般的にある程度階層的に上の人達が好むものというようなことがよく言われるので、「直島で現代アートの評価が高く、高齢者が多い他の島では評価が低くなるのではないのかなあ」と思っていたのですが、むしろ結果は逆でした。

「じゃあどうしてこうなったのだろうか」ということで、それを解釈する上で面白いのがこの結果です。これは「芸術祭であなたはどのように関わられましたか」と尋ねたものです。いろいろなことを聞いてみたのですが、男木島で特に高いのが、このアート作品の制作に協力したとか、小エビ隊というこの芸術祭の運営に携わったボランテ

	作品見学	制作協力	観光客の案内	小エビ隊の補助	イベントへの参加	資材の提供	特に関与せず
男木島 (N=38)	51.4	24.3	35.1	24.3	40.5	35.1	24.3
女木島 (N=44)	77.3	9.1	31.8	13.6	36.4	9.1	36.4
豊島 (N=86)	65.1	7	20.9	8.1	25.6	9.3	30.2
直島 (N=264)	47	1.9	24.6	4.5	22.7	2.3	40.5

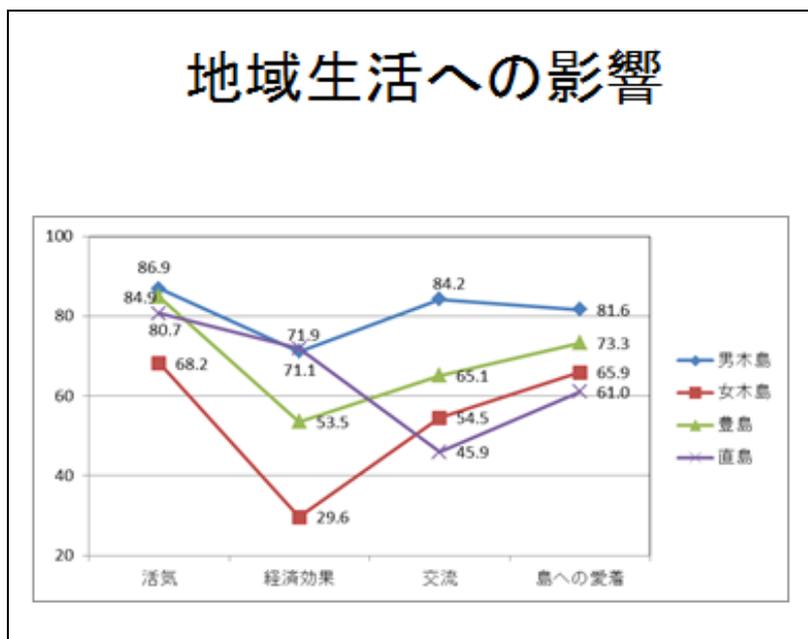
ィアですが、そのボランティアに協力したということですね。あるいはその芸術作品を作るのに必要な資材を提供したとか。そういうことがパーセンテージとしてかなり高い。

実際に聞き取りに行ってもそのとおりで、男木島では島民とアーティストの間、あるいは島民とボランティアの間でいろいろな交流が盛んに行われたようです。そういう人との交わりがあったことで、良く分からないけれども何となくアート作品にも愛着が湧くとか、自分もちょっと制作に関わったから、何となくアート作品に対する自負みたいなものがある程度出てきたとか、そういう感じで評価が高くなったのだろうと考えることができます。

これに対して直島ではそういうようなことが行われなかったのですね。直島にはもともと

と美術館があったのですが、芸術祭に合わせて 2 つ目の地下美術館、地中美術館というものが作られて、展示された作品のクオリティは恐らくこの 4 つの島の中で最も高かったと思うのですが、そういうアーティストと島民が交流するような、あるいは島民とボランティアが交流するような機会というのは、直島に関しては全くなかった。そういうことが評価に影響したのではないかと考えることができます。

続いて、芸術祭が終わった後で、「芸術祭が島の生活にどう影響を与えたか」ということを尋ねました。当初の期待に対して、「活気がでたか」とか、「経済効果があったか」とか、「交流が盛んになったか」とか、「島への愛着が増したか」ということを尋ねたところ、全体的に期待以上の高い数値でした。だから、こういうアーティストというのは、割と島の



人達にもポジティブに受け入れられて評価されているということが、まず第1に言えます。やはりこの点は評価すべきと思います。

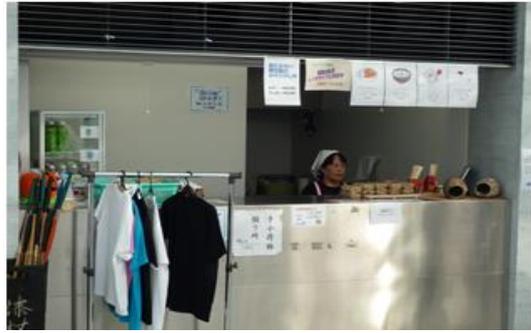
ただ、島の間で評価にかなり大きな差が出ています。大きなのは経済評価に関してですが、女木島が特に低くて、高いのが男木島と直島です。女木島はある意味、イベントに対して傍観するというスタンスで、自治会が何もしなかったということが影響したのだろうと思います。それに対して直島は特産品販売のようなことが盛んに行なわれ、さっきお見せした銭湯のようなものが作られるなど、かなりの収益があったようです。芸術祭期間中に 1 億円を超える収益が出たとも言われており、それらがスコアに反映されているようです。

男木島に関しては、写真のようなものが造られました。これはもともとアート作品として造られたのですが、島の自治会長さんが、「単に観光客のためのイベントにするのではなくて、もうちょっと島の生活に資するようなイベントにしてくれ」と、かなり熱心に働きかけをされました。そういう要求が実って、もともとアート作品として作られた建築物なのですが、その中にこのような物品販売のブースが設けられて、そこで島のおばちゃんとか、おばあちゃんが特産のタコとかを使い、タコ飯のようなものを作って商売に携わっています。儲け自体は直島に比べると微々たるものなのですが、そういう形で副収入があり、経済効果のスパンの高さには貢献しています。

男木島



男木島



もう一つは交流についてです。さきほど言ったように男木島ではアーティストとの交流が割とあったとか、直島ではそれが少なかったということを書いたのですが、そこらへんですね。

そこで、実際に知り合いができたかを尋ねてみたわけですが、「芸術祭を通して、新たな知り合いができましたか」と尋ねると、この通りで、男木島では

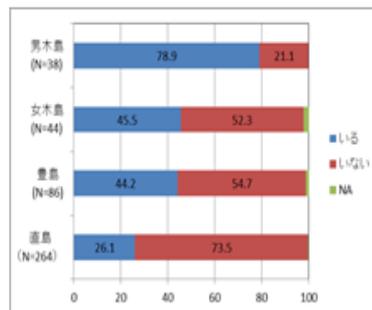
「知り合いができた」と答えた人が非常に多かった。これに対して、直島では顕著に低い。

この「知り合いができた」と答えた図中の青色の人達を対象に「じゃあどういう人と知り合いになりましたか」ということをマルチアンサーで答えてもらったのが右の表です。これを見て面白いのが、意外に観光客が少ないのです。島を訪れた数という点でいうと、観光客が圧倒的に多いのですが、ボランティアとかアーティストとかは極々少数です。でも「知り合いになったのは誰か」と聞くと、観光客というよりむしろアーティストとかボランティア。そっちの方が多くなっています。

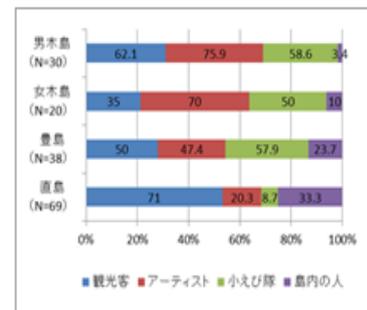
それに対して、直島では逆に観光客が多くなって、これはアーティストとか小エビ隊との交流があまりなかったということの裏返しだろうと思うのです。だから、数という点では非常に多くの観光客が島を訪れたのですが、交流の実質という点で見れば、観光客はそれほど重要な存在ではなくて、むしろ継続的に島に滞在して交流があったアーティストと

島外との交流

新たな知り合いの有無



誰と知り合いになったか(M.A)



か小エビ隊の人達の方が、島の人達にとって重要な意味を持ったということが言えますね。

全体的な評価ですが、アンケートの各内容と整合性がとれているというか、男木島でも評価が高く、女木島も低いのですが、一貫して低いのが直島であるということです。この結果が県の事業評価と全く食い違っているということが、非常に面白いところです。

県の事業評価の中では直島が最も経済効果が高かったということで、直島が一番のモデル地域として取り上げられているのですが、その直島でも住民の事業評価が低いわけ

です。だから住民の事業評価の規定因というのは恐らく経済効果ではない。「じゃあ何か」と言うと、一つは繰り返し言っているように、やはり社会的な交流とか繋がりができたかどうかということが大きいのだらうと思います。

さきほど、小エビ隊の話をしたのですが、このような人達に聞き取りをすると、重要なのは芸術祭が終わった後も、いろいろな交流が続いているということです。今はどうなっているのでしょうか、ちょっと知りたいところです。芸術祭のあと私がインタビューに行った時、小エビ隊の人達は「そういうことで、むしろ、芸術祭の期間中は何やらかんやらで、観光客の案内も忙しくて、あまり土地の人と話すことができなかつたのですが、今は割

とその点がゆっくりゆとりを持ってできるようになったから、今の方が良いです」というようなことを言われておりました。私自身も地域の行事とかに出た時に、小エビの人達と一緒にすることが何回かあったのですが、単に特定のイベントのためだけのボランティアではなくて、ボランティアをきっかけにして、島の人達と関係ができて、その後も交流が継続しているというのは、「島の人達にとって、この事業のイベントの非常に大きな成果なのではないのかなあ」というように考えることができます。

全体的評価

	芸術祭は島に好ましい変化もたらした	次回も自分の島で開催したい
男木島	76.5	73.7
女木島	29.5	47.7
豊島	55.8	64.0
直島	32.6	33.0

交流の継続

「現在、小えび隊に登録しているのは2600人。遠方の人も多いが、実働は100~200人で香川、岡山の人が多い。当初は島を知らない人がほとんど。行きたくても、いつ、どこへ行けばよいかわからなかったが、今は事情がわかるようになり、継続的に行けるようになった。草刈りや文化祭など地元の行事に参加している。島民との交流はむしろ閉幕後の今の方が安定している」

(2011.6 小えび隊事務局長へのインタビュー)

それともう一つは定住条件への影響です。男木島に作品交流館ができ、期間中に物品の販売をしたことを話しましたが、これが芸術祭終了後もそのまま男木島に残されるようになり、島の人達が管理することになって、ずっと販売が継続されています。だから、このイベントは男木島に交流や雇用の場を提供しました。

また、それまで男木島には船の待合室がなかったのです。だから、雨が降ると吹きさらしになっていたのですが、そこが待合室として使えるようになって、非常に改善された。そういう面での効果というのが男木島の人達の芸術祭に対する評価にかなり大きく影響していると考えられます。

ただ、男木島以外ではどうだったかと言うと、「そういう効果というのは、あまりなかったのかなあ」と言うことです。ツーリズムに合わせて、漁業や農業といった産業に対する何らかの対策をするということもなかったし、民宿などができたりはしているのですが、これで生業を立てると言うのは、ちょっと難しく、やはり副業のレベルを出ていない。

それに、期間中に船の運賃の値下げがされたのですが、イベントが終わると値段がまた元に戻ったりして、結局、「あれは観光客のためのイベントだったのだ」みたいな、そういう落胆を産んだりしたことがあります。だから、ここに書いているような感想がアンケート調査で割と多く寄せられました。このへんのことは、やはり、それはそれとして受け止めて考えていく必要があると思います。

これは芸術祭以前に実施した調査の結果ですが、「島の生活課題として何が重要か」というと、やはり医療、交通、教育、そして雇用、この4つです。それに比べると、観光の優先順位はもっと低い。だから、島の人たちにとって、観光の成功が悪いことではないのだけど、より重要な生活課題が他に多くある。それを優先して考える必要があるだろうと思います。

定住条件への影響

- 終わっても後日につながる物がない様に思う。一時的な事だけではいけない。何かを残すことがあればよかった。何かわからないけど。(豊島 60代 女性)
- 芸術祭開催中は日ごろ静かな島に大勢の人が訪れとても賑やかでした。三ヶ月間は船が増便して、運賃も安くなり生活も少々活気がありました。が、終わったら島民のために何が残ったでしょうか。経済効果？それは大勢の人を運んだ海運会社と島外の飲食業社ではないでしょうか。それも島民は後回しにされたように思います。(女木島 70代以上 女性)

自由記述回答より

生活課題の優先順位

	豊島	直島
医療・福祉の充実	3.79	3.73
海上交通の改善	3.61	3.65
子育て・教育環境の充実	3.43	3.53
自然環境の保全・再生	3.42	3.51
農業の振興	3.48	—
治安・防災対策の充実	3.3	3.43
相互扶助の強化	3.39	3.3
漁業の振興	3.45	3.1
製造業の振興	—	3.35
公共事業の充実	3.28	3.26
島内交通の改善	3.3	3.1
環境事業の推進	3.08	3.24
伝統文化の継承	3.14	3.17
観光業の振興	2.89	3.08

・2009年実施。回収率は豊島62.2% (177/285)、直島82.0% (250/305)
 ・「きわめて重要」4点、「まあ重要」3点、「それほど重要でない」2点、「ほとんど重要でない」1点

最後にまとめですが、繰り返し言っているように住民評価の規定因としては、外との交流とか、社会的な繋がりとか、あるいは、定住対策面での効果とかが大きな意味を持っています。そして、住民の評価は、その推進主体である県の事業評価とかなり食い違いがあったと考えることができます。経済効果というのは住民評価の中であまり大きな意味を持っていなかった。だから、こういう食い違いが生じたということなので、やはりその食い違いを少なくしていくということが、今後の課題として検討されるべきだろうと思います。

個人的には「もし、このようなイベントを離島でやるのなら、離島振興事業とかともリンクさせて行うのが本来の姿なのではないのかな」と思ったりします。しかし、現実的には難しいので、やはり、「このような事業には島の住民も参加して、そこでいろいろな創意工夫を見出して、それで、WinWinの互恵的な結果を求めて行くというのが、究極的に求められることなのではないのかな」と考えるわけです。

ただ実際にはそうはなっていないで、実行委員会に多数の団体、機関が含まれているのですが、そこに会場になった島が含まれていないということです。土庄町や高松市といった島が属する自治体は入ってはいるのですが、島がその自治体と海で隔てられているので、なかなか島の情報やニーズが自治体に反映されないという現実があります。

まとめにかえて

- 住民評価の規定因としての社会的交流と定住対策
- 県の事業評価との関係
- 事業計画の策定過程への住民参加

瀬戸内国際芸術祭実行委員会

会長	香川県知事 田嶋 喜博
名誉会長	前香川県知事 直嶋 秋紀
副会長	香川県商工会議所連合会長 高松市長
総合プロデューサー	稲吹 浩一郎 (当時直島振興局特設時局理事長)
総合ディレクター	北川 博之 (金子高松大学教授)
協賛団体	香川県、高松市、土庄町、小豆島町、直島町、(財)直島振興局特設時局、(財)直島教育文化振興財団、香川県市議会、香川県町村会、四国芸術交流財団、四国地方振興財団、四国振興財団、国立香川短期大学、四国芸術連合会、香川県商工会議所連合会、香川県商工会連合会、(社)香川芸術文化会、香川県農林漁業振興会、香川県漁業協同組合連合会、(株)百十四銀行、(株)香川銀行、香川大学、四国放送大学、徳島大学、高松大学、香川県文化協会、(財)四国民衆博物館、(社)香川県観光協会、(社)日本旅行協会中国四国支店香川地区会、(財)高松コンベンション・ビューロー、香川県ホテル旅館生活衛生同業組合、四国観光振興(株)、高松市平塚気象道(株)、香川県観光協会、(社)香川県バス協会、香川県タクシー協同組合、(財)香川県老人クラブ連合会、香川県婦人団体連合会、(社)日本青年会議所四国支部香川ブロック協議会、香川県青年団協議会、香川県青年協[オプデーパー]、岡山市、玉野市、岡山県商工会議所連合会、岡山大学

そういうこともあるので、やはり「それぞれの島の自治会とかが正式の構成メンバーとして、事業計画の段階から参加して、何をやるかということについて議論に加わるべきではないのかな」と思います。もちろん、島は高齢者ばかりになっているので、その場合には「地元のサポートとして大学などにそれが求められたりするのかなあ」と思います。

以上です。

まとめにかえて

- 住民評価の規定因としての社会的交流と定住対策
- 県の事業評価との関係
- 事業計画の策定過程への住民参加

[本城先生]

室井先生、ありがとうございました。ただ今のご講演に対しまして、ご質問がございましたら、よろしくお願いたします。

このアンケートを取られる時に、私も少しお手伝いをさせていただいたのを思い出します。何といっても回収率が良かったことです。非常に高い回収率で、今回の評価はそれに基づいてなされているということです。新聞やテレビでは「良かった。良かった」というような報道がなされているのですが、評価は島によって違っているし、全てが万々歳ではないということがこの調査に出ています。

どうぞ。

[質問者]

女木島は何に期待するかと言うと、「活気に期待する」と言うのが 90%を超えていました。ところが終わった後から「どうだった」と言うのが、一番下の 60%ぐらいでしたね。女木島は活気を期待していたのですよね。熱心でないから活気が生まれなかったのかも知れませんが、どう考えていますか。

[室井先生]

女木島には自治会のスタンスと住民のスタンスが必ずしも一緒していなかったという部分があった。住民の方は賛成でも反対でもないというか、良く分からないけど、やるのだったら、それはそれで漠然とした期待はあったのだと思います。ただ自治体の方は、それに対して懐疑的であったかと思えます。だから何もしなかったということでしょうかね。

[本城先生]

経済効果や活気はやはり熱心さから出ているのかもしれない。

[室井先生]

はい、全く何もしなかった。それがこのような結果になったように思います。

[本城先生]

2 回目を終わった後もアーティストが数人豊島に住み着き、小エビ隊との交流もある程度残っていると聞いておりますけれども。

それから、どこかの町長から聞いたのですが、「億の単位で収入を上げましたよ」と。ですから経済効果はあったようですが、島民に対してどうであったかと言うことでしょうかね。

はいどうぞ。

[多田先生]

男木島で島民の評価が最も高かったということでしたが、僕的には男木島と言えば灯台と思っているのですけど。そこまで島民が参加しているのならば、あの灯台、もっと何とかならなかったのかなと、そうすればもっと経済的効果が表れたのではと。そのへんはどう思われますか。

[室井先生]

映画でも有名になったきれいな灯台があるので、そのようなものを観光資源として、経済的に活用するというのも一つの考え方ではあるのかもしれませんが、男木島の人達は、「灯台は灯台として残していきたいと考えていると思います、それで収益を上げるといふ発想はなかったのではないのかなあ」と思いますし、それはそれで、その方が健全だったと思います。どういふものが望ましい形なのか分からないのですけれども、どうなのでしょうかね。

[多田先生]

男木島の人達自身がそんなに経済効果を期待していたのではなくて、活気を期待していて、この芸術祭にかこつけて灯台で何とかしようという気が島の人達になかったということですね。

[室井先生]

灯台の話は全く聞いたことがないのです。ただ、あのように交流館の中で物品販売をして、それなりに楽しかったというのですね。だから次回の芸術祭に向けて、新しく工夫した品を考えようとしておられるかもしれません。「魚の燻製みたいなものを作ってはどうか」ということを議論していたころまで、僕は香川におりました。その後、その話がどうなったのかよく分からないのですが。収益は収益で大切なのですが、あまり規模を大きく

し過ぎると、逆にそれがリスクになると思います。その島の雇用量なりスケールに合った適正な規模で、経済的な収益と同時に何か参加して楽しいと思われるような仕組みとか、あるいは、公共的なインフラがすごく不十分なので、観光とリンクさせてそれが多少なりとも改善されるとか、そういうことの方が島にとっては重要なのではないかと思います

[本城先生]

室井先生が最初に懐疑的な見方の方から入って行ったとおっしゃったのですが、僕はこれ非常に大事なことだろうと思います。そのようにしてまとめて行く人が少なくなくなってきているように思いますね。

この成果は県に提出しております。県の委員会の委員から、「大学で評価された成果はぜひぶん頭に残っているよ」という話を聞いておりますので、県サイドにも通じていると私は信じております。

稲田先生、何か最近の芸術祭のことでお感じになることはありませんか。芸術祭の開催域が西側にも今度は伸びて行きましたよね。

[稲田先生]

ありがとうございます。やはりイベントと生活との乖離というか、自分たちの実生活が円滑に運営できないほどの人が大勢来て、大騒ぎの祭りがあって、その後に波が引いたみたいに来なくなってしまいます。島に住み続ける人にとって、それをどのように捕えるべきなのかというところが、人によってずいぶん違っているなと思っています。

僕は伊吹島に何度か行くのですが、それを良く感じています。「芸術祭をやるのは良いけれども、自分がそれに巻き込まれるのは少ししんどいかな」みたいなことをおっしゃる島の人が多くて、「それが経済効果に繋がるのであれば、まだ発展性があると思うのだが」というようなことを聞きます。

やはり「イベントとそれがボトムアップのように、人々の生活にどのように効いてくるのかということが大切なのかな」と思っています。生活への効果がどうかということは将来のことで、イベントがきっかけではあるのですが、本当に島の生活を変えるだけの力があるのかどうかということをも自分自身は感じているのですが、多分、室井先生も同じように感じていらっしゃるのではないかと思います。もし感想のようなものがあれば教えて下さい。

[室井先生]

同じような感じですが。政治家でないので、どうしたら良いのかというのは、どこまで考えて良いのかというもどかしい部分が常にあります。だけど、まあ、あまり端的に考えるよりは、多少なりとも出た成果みたいなものをいかに伸ばすかという発想が大事だと思っ

[本城先生]

このような芸術祭を通してでも、島の文化・伝統が守られて行くということが大切ですね。守られて継続できて行くような方向に、我々の方から手伝っていかねばという気がいたします。ですから、芸術祭は何も悪いわけではありません。ただ、島民側が期待するものが、かならずしも表に現れるような喜ばしいことばかりではないというように感じています。

他にございませんでしょうか。はいどうぞ。

[質問者]

今日は貴重な話をありがとうございました。芸術祭の関与率が男木島ですごく高く、直島が極端に低かったことが影響して、島民達の芸術祭への愛着の差に繋がっていったのが分かったのですが、この芸術祭の関与が男木島でこれだけ高い数値として出たのは島民側の性質であったのか、たまたまそこに入った芸術家達が島民と関与できるような工夫をするなどの何かを持っていたのか、高い関与率が生まれた要因として何か考えられるものはありますか。

[室井先生]

はい。後者の方だと思います。島民の性質の違いではなくて、どういう芸術家が島に配置されたかであると思います。男木島には乳母車をアートにするなど、割と親しみやすいアートが多かったのです。それで、積極的に島の人と関わるようになった。女木島はそうではなく、すごく繊細な作品で、それが洞窟の中に作られたりして、素人の島民が関われるようなものではなかったし、また、アーティストの方も積極的に関わっていなかった。

こういうこともあって、女木島の自治会長さんは基本的に批判的なスタンスに立たれていたのですね。当初、少しはアーティストに期待していたのでしょうけれども、アーティストが決まった時点で、「あー、もうこれ駄目だと思った」というようなことを言われていました。すなわち、「イベントというものは成果あるいは結果の部分だけではなくて、イベントが成立するまでのプロセスがすごく重要だ」ということを伝えたかったのだと思います。

[本城先生]

それでは時間になりました。どうもありがとうございました。